

浄土

monthly JODO

合併号
2017

February

March

法然上人鑽仰会

貧乏骨董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



右の二つは傷みがないところをみると未使用のものだろう。いずれも骨董市で見つけたもので、ひとつ 300 円から 500 円

ただの汚い黒い木箱だが、これは活版印刷で使う文選箱である。

活版印刷では文選工と呼ばれる職人が、原稿とこの箱を左手に持ち、右手で活字が収められた棚からひとつずつ活字を拾ってゆく。箱に収められた活字は植字（ちよくじ・しよくじ）工に渡される。文選工が拾うのは漢字とかなだけであり、約物と呼ばれる句読点や括弧類は植字工のそばに置かれている。

植字工はステッチと呼ばれる鍵型の道具を左手に持ち、一字一字活字を並べ、行間にはインテルと呼ばれる薄い金属を入れ込みページを組み上げる。組み上がると四辺に木の枠をはめ、木綿のくくり糸で縛り、固定する。そして、校正刷りに回され、間違いがあれば訂正され印刷される。

今では活版印刷による本はほとんど見られない。句集や歌集、詩集などにはときどき活版印刷のものがあるが、小説や評論集といった散文の書物では皆無と言

つていいだろう。

私がエディトリアル・デザイナーの世界に入った四〇年ほど前には、雑誌でもまだ活版のページがあり、そこで活版印刷の指定のやりかたを覚えてが、すぐに写植を使ったオフセット印刷へと全面的に変わっていった。ちょうど活版印刷の終焉期にあたるわけである。組版は写植となり、その写植も手動式から電算写植へと進化して行く。そして現在では写植による組版もほとんど姿を消し、コンピュータによる組版（DTP）が主流となっている。

さてこの文選箱だが、写真を見てもうえばわかるように、規格が統一されている。内ので、縦一五〇ミリ、横七五ミリ、深さ一八ミリである。五号活字（10・5ポイント）が一行二〇字の四〇行で、八〇〇文字入ることになるので、四〇〇字詰め原稿用紙二枚分ということになる。重さは約二キロになる。横の仕切りのないものや、二段から六段のものもあり、縦の仕切りを備えたものもある。

もうほとんど姿を消した活版印刷ではあるが、その暖かな風合いや力強さなどが見直され、若いデザイナーのあいだで人気が高まっている。廃業した印刷所から、小型の活版印刷機を譲り受け、自分で名刺やカードを印刷したり、また、活版印刷に特化したサービスを提供している印刷所も増えている。アナログ印刷の再評価というところだろう。

浄土

2017/2・3月号 目次

連載 私の好きなご法語.....	八木季生	2
法然上人と親鸞聖人(八)	林田康順	4
連載 江戸の川を歩く⑪.....	森 清鑑	10
連載 響流十方	林田康順	16
連載小説 渡辺海旭⑦⑥	前田和男	20
連載 誌上句会	選者=無縫庵烏鷺坊	28
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32



表紙題字=中村康隆元浄土門主
表紙写真=鬼海弘雄
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

来迎引接

法爾ほうにの道理と云う事あり。

ほのおは空にのぼり、水はくたりさまになる。菓子の中に、すき

物あり、あまき物あり。これらはみな法爾の道理なり。

阿弥陀仏の本願は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんと、ちかい給いたれば、ただ一向に念仏だにも申せば、佛の来迎は法爾の道理にてうたがいなし。

人間の生活環境には、様々な「法」がある。自然法と人為法とにまとめる事が出来る。自然法は大宇宙に本然的に備わった法であって、大宇宙の開闢かいびやく以来備わった法であって、これに逆らう事も、変化させる事もできない。

人為法は人間の生活の必要にせまられて、人間の考え出した法であって、時代や環境の変化によって、適宜に変わっていくものである。

ここに掲げたご法語の「法爾の道理」は、自然法であって、火を焚けばほのおは手を加えない限り空に登り、水は必ず高いところから低いところに流れる。

菓子と言ってもこの時代の菓子は、水菓子であって、現代のような菓子ではない。果物には自然に酸っぱいもの、甘いもの、自然に備わった味があつて、人工的に手を加えない限り、持ち味を変える事は出来ない。

阿弥陀さまの本願は、法蔵菩薩が十劫じじゅうの昔に四十八願をたてられ、願成就して阿弥陀仏となられた。十劫の過去とは、無限の過去に誓われたものであって、表現を変えて言い換えれば、念仏者を来迎引接らいこういんぎやく下さるのは法爾自然じねんの道理であるから、念仏を称えさえすれば、念仏者の人柄の如何を問わず、お浄土にお迎えくださることは間違いがない。

法然上人がご苦勞されたのは、九歳のとき朱に染まった父親が、出家をして全ての人が救われる道を求め弘めなさいということであったから、今まで自分の体験した方法では、「全ての人」は当てはまらない。そこで阿弥陀仏の本願を法爾の道理と受け取れば、凡夫が極樂往生を達成するのは間違いない、念仏の一行に徹底することだとされたところが、このご法語の尊いゆえんである。

法然上人には、五十年に一度今上天皇から諡号しごうを頂く慣例があるが、平成天皇からは「法爾」という諡号を頂いている。念仏を称える全ての人を極樂浄土に導く方法を見出だした法然上人に相應しい諡号を頂いたと言わざるを得ない。

大本山増上寺法主

八木季生
台下

法然上人 と 親鸞聖人

【連載八】

法然上人と
「浄土三部経」

④

林田 康順

(大正大学教授)

阿弥陀仏を主人公として——「浄土三部経」の主旨——

前回、「浄土三部経」の拝読を含む五種正行を修めれば、私達の心は自ずと称名念仏一行に向かうことになるという法然上人のご法語を紹介しました。それでは、そもそも法然上人は、「浄土三部経」の説示内容をどのように捉えておられたのでしょうか。『逆修説法』において法然上人は、「浄土三部経」の各経典について、次のようにそれぞれひと言でまとめ下さいました。

『無量寿経』には、はじめに阿弥陀如来の因位の本願を説き、次に彼の仏の果位の二報莊嚴を説くなり。しかれば、この経には阿弥陀仏の酬因感果しゅういんかんかの功德を説くなり。(昭法全二三六)

(試訳 『無量寿経』)には、はじめに阿弥陀仏が法蔵菩薩であられた時に発された本願

が説かれ、次に法蔵菩薩が成仏された結果としての阿弥陀仏のお姿や極楽浄土の莊嚴が説かれています。ですから『無量寿経』には菩薩時代の修行と阿弥陀仏と極楽浄土の功德が説かれています。）

『観無量寿経』に二つの意あり。はじめには定散二善を修して往生することを明かし、次には名号を称して往生することを明かす。：凡そ念仏往生の諸行往生に勝ること多義あり。（昭法全二三八―二四四）

（試訳 『観無量寿経』には、大きく二つの内容が説かれています。はじめに、静寂な境地に心を留めて修める行や散り乱れる心のままに修める行によって往生することが説かれ、次に阿弥陀仏の名号を称えて往生することが説かれています。：諸行を修めて往生することよりも、念仏を称えて往生を遂げることの方が勝れている典拠は数多くあります。）

『阿弥陀経』は、はじめに極楽世界の依正二報えしょうにほうを説き、次に一日七日の念仏を修して往生することを説き、後に六方の諸仏、念仏の一行において証誠護念しょうじょうごねんしたもう旨を説けり。（昭法全三三七）

（試訳 『阿弥陀経』は、はじめに阿弥陀仏と極楽浄土について説かれ、続いて一日から七日にわたって念仏を称えて浄土に往生することが説かれ、最後にありとあらゆる世界の諸仏が念仏一行による浄土往生の真実であることを証明され、かつ、念仏行者を護り念じられることが説かれています。）

このように法然上人は、「浄土三部経」の主旨は終始一貫しており、いずれも阿弥陀仏を主人公とし、極楽浄土への往生を促し、そのために念仏一行をもっぱら修めるべきこと

を勧めている、と捉えておられます。すなわち、法然上人の信仰の中では、「浄土三部經」のすべての説示を仏説として等しく尊んでいる姿勢が明らかなのです。

三仏同心による選択思想―全仏教を鳥瞰して―

法然上人は、その主著『選択集』において、第八章と第九章を除く第三章から第十六章までの全十二章において、第三章から第六章までは『無量壽經』の説示を中心に、第七章から第十二章までは『觀無量壽經』の説示を中心に、第十三章から第十六章までは『阿彌陀經』の説示を中心に阿彌陀仏と釈尊とあらゆる諸仏との三仏が同心に、その他の諸行と比較した上で選択本願念仏はもつとも勝れた功德があることを体系的に明らかにしています。

さらに法然上人は、『選択集』第十六章私釈段において、『選択集』全体の説示を踏まえつつ、『般舟三昧經』の説示を加えて、弥陀・釈迦・諸仏の三仏が同心に称名念仏一行を選び取り、諸行を選び捨てたことを八種選択という形式を通じて明言されるのです。

およそ三經の意を案ずるに、諸行の中に念仏を選択して以て旨歸となす。まず『双卷經』の中に三の選択あり。一には選択本願、二には選択讚歎、三には選択留教なり。（中略）次に『觀經』の中にまた三の選択あり。一には選択摂取、二には選択化讚、三には選択付属なり。（中略）次に『阿彌陀經』の中に一の選択あり。いわゆる選択証誠なり。（中略）しかのみならず、『般舟三昧經』の中に、また一の選択あり。いわゆる選択我名なり。（中略）本願と摂取と我名と化讚と、この四はこれ弥陀の選択なり。讚歎と留教と付属と、この三はこれ釈迦の選択なり。証誠は六方恒沙諸仏の選択なり。然ればすなわち、釈迦、弥陀および十方の各恒沙等の諸仏、同心に念仏の一行を選択したもう。（聖典三・一八三―一八五）

（試訳 およそ「浄土三部経」の説示意图を勘案すると、浄土往生のためには、あらゆる諸行を選び捨てられ、称名念仏を選び取られたこと（選択）を本旨とします。まず『無量寿経』には三種の選択があります。一つは、阿弥陀仏が念仏を本願とされたこと、二つは釈尊が念仏を讃歎されたこと、三つは釈尊が念仏を後の世まで留め遺されたこと（留教）です。（中略）次に『観無量寿経』には三種の選択があります。一つは、阿弥陀仏が念仏行者を摂め取られること（摂取）、二つは阿弥陀仏の化仏が念仏行者を讃歎されること（化讃）、三つは釈尊が念仏を後の世に伝え遺すこと（付属）です。（中略）最後に『阿弥陀経』には一種の選択があります。それは諸仏が念仏往生は真実であると証明されていること（証誠）です。（中略）そればかりでなく、『般舟三昧経』にも一種の選択があります。それは阿弥陀仏自らがわが名を呼べとお示しになっていること（我名）です。（中略）以上の内、本願と摂取と我名と化讃の四種は阿弥陀仏による選択です。讃歎と留教と付属の三種は釈尊による選択です。証誠はあらゆる世界の諸仏による選択です。すなわち釈尊と阿弥陀仏、そしてあらゆる世界の多くの諸仏は、同心に称名念仏一行を選択されているのです。）

このように法然上人は「浄土三部経」の説示を仏説として等しく尊ばれ、弥陀・釈迦・諸仏の三仏同心からなる選択思想を確立されたのです。各宗派の教義を網羅し、鳥瞰し得た法然上人だからこそ、密教や『法華経』などが開示する世界観には決して流されず、全仏教の教えが念仏一行に帰結し（帰趣）、すべての仏の意思が念仏一行に統一される（統摂）ことを明らかにすることになったのです。

弥陀化身善導への信仰―選択と偏依―

加えて法然上人は、『選択集』において、善導大師が阿弥陀仏の化身であるという中国に伝来する善導弥陀化身説に基づき、他のいかなる諸師にもよらず、ただ善導大師お一人をより所として教義を構築するという偏依善導一師の立場をはじめて表明されます。何よりその立場は、善導大師お一人が阿弥陀仏の大慈悲の発現である本願念仏の意義を明らかにされていたことを正確に読み取られたからに他なりません。法然上人は、多くのご法語で善導大師の弥陀化身としての立場を伝えられます。

いかにめでたき人と申すとも、善導和尚にまさりて、往生の道を知りたらんこともかたく候。善導また凡夫にはあらず。阿弥陀仏の化身なり。阿弥陀仏の、わが本願をひろく衆生に往生せさせん料に、かりに人に生まれて善導とは申し候なり。そのおしえ申せば、仏説にてこそ候え。あなかしこあなかしこ、うたがいおぼしめすまじく候。(『正如房へつかはす御文』昭法全五四四)

(試訳) どんなに立派だと言われる人であっても、善導大師よりも深く浄土往生の道を知ることは難しいでしょう。なぜなら、善導大師は私達のような凡夫ではなく、阿弥陀仏の化身としてこの世に現れたお方だからです。阿弥陀仏がその本願の御教えを人々に弘め、浄土往生を遂げさせるために、仮に人の姿として生まれて、善導大師と申し上げたのです。ですから、善導大師の教えはそのまま御仏の御言葉に他なりません。ああ、何と恐れ多いことでしょう。決してその御教えを疑ったりなさいませんように。(。)

〈善導大師が阿弥陀仏の化身である以上、その教えは仏説に他ならない。〉こうした法然上人による善導大師への確固たる信仰があつてこそ、はじめて偏依善導一師の立場は成立するのです。偏依善導一師という立場は、本願念仏への絶大なる信頼を込めて語られた次のような一連のご法語と密接に関連しています。

本願の念仏には、ひとりだちをせさせて助をささぬなり。（『禪勝房伝説の詞』昭法全四六二）

（試訳 阿弥陀仏が本願に誓われた念仏はただそれだけを独立させて、その他に何の「助け」も添える必要などないのです。）

法然上人が、本願念仏には「助」を要しないと述べられたのは、本願念仏が三仏同心による選択に基づく仏説であつたからであり、同様に善導一師に偏依し得たのは、弥陀化身である善導大師の説示が仏説であつたからに他なりません。このように法然上人は、「浄土三部経」と弥陀化身である善導大師による説示との有機的な融合からなる完全無欠にして画期的な教義を確立して下さったのです。

（続く）

江戸の川 を歩く

第十一回

江戸ウォーカ―

森
清鑑

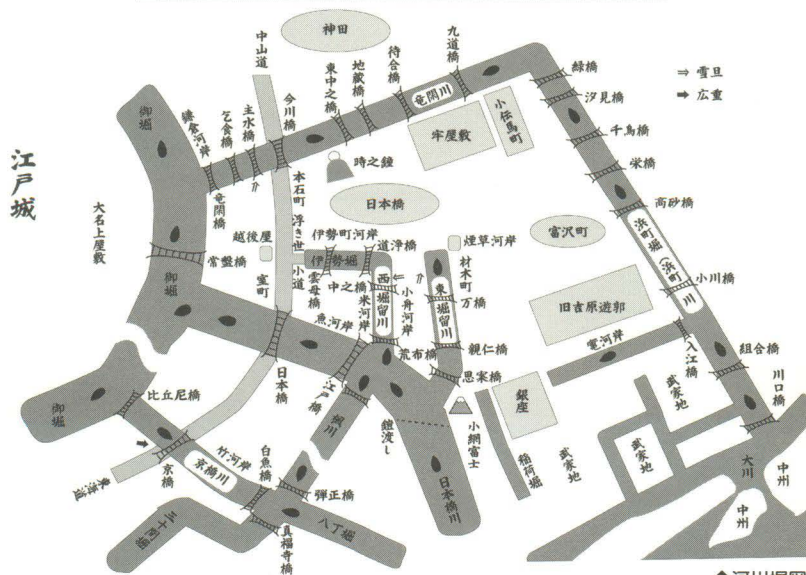
堀留川
ほりどめ

家康が江戸に入府した一五九〇年には、神田川は大川からちよつと内陸に入った程度の流路。平川が日比谷入り江に注がれ、石神井川が上野を通って南北に流れていた。この二つの川が領域を湿地帯化し、たびたび洪水をもたらす。そこで、家康は大工事を命令し、二つの川の流れを東西に変える。すなわち大川に向ける。こうして、誕生したのが、神田川であり、日本橋川である。

埋立地、霊岸島の北辺を流れる日本橋川を上り、江戸橋まで来ると、北側に二本の川が見える。これが堀留川である。東堀留川と西堀留川。両川とも、その名の通り、すぐ行き止まりになる。周囲は、小舟町、小網町、堀江町などの大繁華街だ。そしてここにこそ、その昔、石神井川が流れ込んでいたのである。石神井川を神田川に向け、湿地帯を埋め、整備し、一大町民街を完成させる大工事。かくて江戸の中枢ともいえる、町民文化の街が形成される。

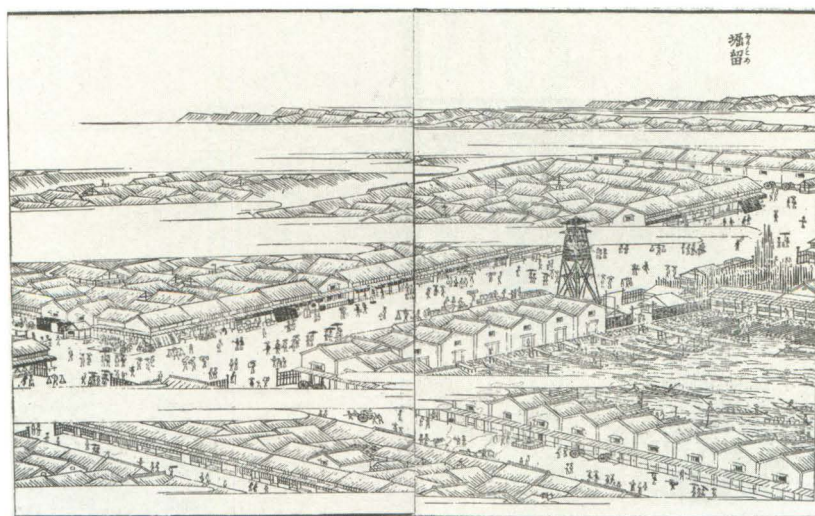
大川から舟を入れて遡ると左岸は茅場河岸、右岸は

浜町堀・竜閑川・堀留川・京橋川



小網町。鎧の渡しを過ぎると、右手に小網富士が見える。すると、思案橋。潜ると次は親仁橋^{おやし}。そして万橋。その先は堀留で行き止まり。これが東堀留川である。右岸は材木が林立する材木町。煙草河岸。きざみ煙草の取引場である。この川の右側に吉原がある。葦が茂る湿地帯を埋め立て、初めて公認の遊郭が築かれた処。幕府に直訴し、それを創った人が庄司甚右衛門。親仁橋とは彼のことを指し、行くか行くまいか思案橋。ここは江戸では珍しい「庶民が天下の街」である。

次は江戸橋の袂、荒布橋から入る西堀留川である。橋を潜ると右岸には、蔵がずらりと並ぶ小舟河岸。左岸は米河岸を象徴する蔵が建ち並ぶ。江戸の米価格はここで決められ、庶民に配布された。中之橋を潜ると塩河岸。行徳から運ばれてきた塩の集積地である。ここで行き止まって、流れは左へ。道浄橋を潜ると伊勢堀。伊勢町河岸では、あらゆる物の取引が行われている。堀の南には、瀬戸物問屋が並ぶ瀬戸物町。その下には、小田原町、そして按針町、魚河岸となる。「山本海苔」、「にんべん」など今も続く大店がひしめく。伊勢堀もすぐ堀留となり、その先は、浮き世小道で、



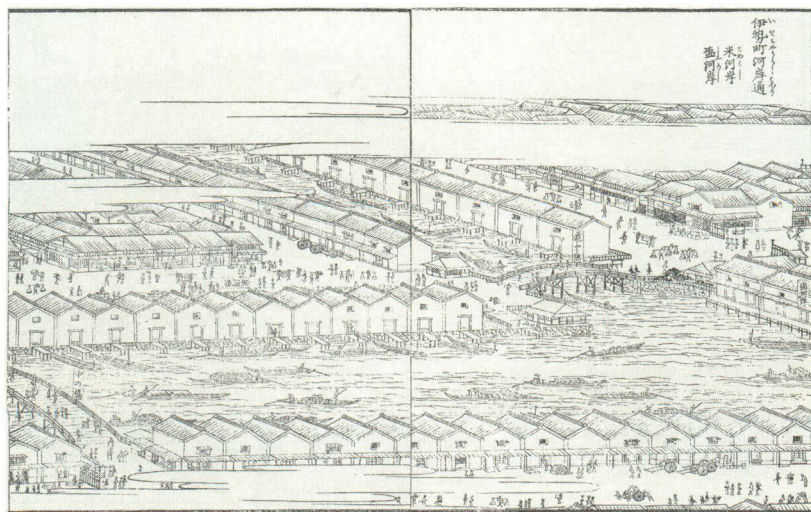
◆江戸名所図会：東堀留川：絵の右堀留。沢山の荷船が係留。堀の右側には材木が林立。周囲は蔵が連なる。家屋は密集し、堀留町の人通りははげしい。

日本橋から来る室町通りに出る。正面に越後屋（三越本店）がある。これが西堀留川。

平行して流れる二本の川筋は、日本橋川掘削と同時に掘られた家康による運河建設の初手に造られた。そのため、堀留が船運貨物の初期集積所になっていたのである。

浜町堀（浜町川）

そして、この堀留川を大きく囲むように、くの字型の水路ができる。それが浜町堀と竜閑川である。浜町堀は大川の中州から北に向かって掘削が開始される。一六一五（慶長二十）年からのことである。大川の川口橋を潜って舟を入ると、次は入江橋。この間、左手一帯は、大名、武家屋敷で、その周囲を水路が巡っているが、大川と浜町川の水路でもある。その一つ、浜町川入江橋から左に入る水路には著名な竈河岸（かまどがし）を扱う店が多かった）があり、その北側は旧吉原町遊郭。遊郭が明暦の大火後、浅草の新吉原に移転する前は、浜町堀からの流れが、ぐるりと遊郭を囲んでいた。竈河岸の水路は、その名残である。そしてこの



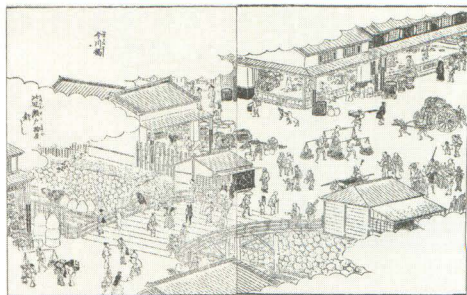
◆江戸名所図会：西堀留川、伊勢町河岸。米河岸、塩河岸。蔵がずらりと並び、荷船が行き交う。

流路の行き止まりに、銀座がある。貨幣鑄造の原材料運搬にも使われていたのである。入江橋を左に見て、先に進めると次は高砂橋、そして栄橋と続く。左岸は吉原遊郭から古着屋が集まる富沢町に変わる。家康は盗賊、鳶沢甚内を捕らえる代わりに、逆に影の盗賊改めとして治安に貢献するよう厳命。古着屋元締めの特権を与える。かくて古着市は江戸の名物になる。この地がいつしか、鳶沢がなまって富沢に。現在も繊維問屋の町としてその面影を残す。そして千鳥橋、汐見橋、緑橋へ。短距離にこれら何本もの橋が架かっているのは、道で区画された多くの庶民街が連なっているためである。今、緑道と化しているが、往事、浜町川の川幅はずっと広く、船運が活発であった。明治の小唄「浮いた、浮いた、の浜町河岸に」とあるように、元吉原遊郭縁を流れているので、江戸の風情を満喫できる流れでもある。浜町堀の左右には河岸が連なり、船運に満ちていた。一六九一（元禄四）年、浜町堀はその先、小伝馬町まで開削される。

竜閑川

時を同じくして、日本橋川の御堀の部分、常盤橋を潜って、右手鎌倉河岸のところから北東に竜閑川が開削される。そして、小伝馬町のところで浜町堀とつながり、くの字の流れを構成するのである。この川の特徴は、物資船運のために、町民の手で掘削されたところにある。

日本橋川（御堀）に面し、鎌倉河岸と接する竜閑橋を潜って舟を運ばせる。この地に幕府の茶坊主、井上竜閑が住まいしていたところからついた名。乞食橋の次が主水橋。左岸に主水河岸が広がる。ここには、瀬戸物の店が密集している。家康の菓子司（將軍お菓子係）の大久保主水が住んでいたところからついた名。本名は大久保忠行で、江戸城下の上水工事の命を受け、



◆江戸名所図会：今川橋。絵の下、竜閑川。道は室町通り。

神田上水の元を造る。この功績により家康から主水の名を与えられる。多才の人である。彼の邸宅前に井戸があり、有数の名水で「主水井」と言って將軍のお茶の水として使われた。

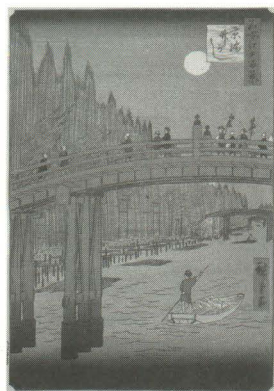
今川橋

主水河岸の次が今川橋である。今川橋は、日本橋を渡ってまっすぐ北上する室町通り、十軒店本石町通り、つまり中山道に架かる重要な橋。この辺りの名主、今川善左衛門からついた名。目抜き通りなので人々の往来も多く、雪旦は、米俵を積み上げた大八車を牽く者、天秤棒を担いで商いする、「ぼてふり」、町民に混じって歩く武士の姿を描いている。

今川橋の右手からは本石町の時の鐘が聞こえてくる。さらに中之橋、地藏橋を過ぎると待合橋。ここから右手には小伝馬町の牢屋敷が広がる。そして流れは浜町堀に繋がるわけである。竜閑川は、江戸町民の繁華街を分ける意味でも重要な役割を持つ。すなわち、この川の北は、神田であり、南は日本橋というわけである。

京橋川

もうひとつ短いが重要な河川が京橋川である。江戸湾、鉄砲州から入る八丁堀と外濠を繋ぐ短水路だが、楓川、三十間堀、八丁堀の流れの交差から入るだけに物資の運搬もさかんで独特の世界を醸し出していた。白魚問屋の根拠地、白魚橋を潜ると右手には、江戸の竹材を一手に受け持つ竹河岸が展開。とにかく無数の竹が林立している。すぐ、京橋にぶつかる。東海道に架かる橋である。広重は、竹河岸に向かって夜空に月影の中、京橋の下を潜る、船頭の姿を描いている。今日では考えられぬ風情である。橋の右手には歌舞伎座があり、歌舞伎発祥の地。さらに大根河岸や薪河岸が続き、比丘尼橋で外濠にでる。



◆広重：京橋から竹河岸を見る。

響流十方こうるじっぽう

げにも凡夫ぼんぶの心は、物くるい、酒に酔いたるがごとくして、善惡につけて、おもいさだめたる事なし。一時に煩惱百たびまじけりて、善惡みだれやすければ、いづれの行なりとも、わがちからにては行じがたし。

（『往生淨土用心』）

実に凡夫の心は乱れに乱れ、酒に酔っているようなもので、善惡を正しく判断することができないものです。一瞬のうちに百通りもの煩惱が沸き起り、善惡の判断が乱れやすいものですから、たとえどのような行であっても自分の力で成し遂げられるものではありません。

除夜の鐘と百八の煩惱——釈尊出世の本懷——

昨年十二月八日、テレビ朝日の人気番組「羽鳥慎一モーニングショー」に同僚の先生と共に私のコメントが紹介されました。その前日、番組制作スタッフの方から大正大学に連絡が入り、私に対応が回ってきたのです。聞けば、明朝の番組で除夜の鐘を特集したいということでした。何とも忙しないことだなあと感じつつ、時間を調整の上、夕方から二時間ほど電話取材に応じることとなりました。除夜の鐘は、そもそもの頃から始まったのか、誰が撞くべきものなのか、いつ撞き始めていつ撞き終わればいいのか、なぜ煩惱を百八と数えるのか等々、矢継ぎ早の質問に当惑しつつ、仏教やお寺の広報に少しでも結びつけばと思い、精一杯応答していました。

ところが、スタッフの方とのやりとりを進めていくと、番組では除夜の鐘の概要を紹介した後、除夜の鐘を巡るトラブルを取り上げたいということです。実は、ここ数年、除夜の鐘を騒音だと指摘する苦情が相次ぎ、自粛する寺院が増えているということでした。電話取材を終えた後、あれこれと調べてみると、なるほどいくつかの寺院でトラブルが発生している事実を知りました。東京都小金井市の千手院の場合、一〇数年前に伽藍の建て替え整備をした結果、一般家庭から数メートルしか離れていない場所に梵鐘を移動しました。すると、住

民とのトラブルになり、裁判所の調停の結果、梵鐘の周りを防音パネルで囲うことを条件に和解しましたが、その後、鐘を撞いたことはないそうです。

難しい世の中だなあと感じつつ、八日の晩、録画した番組を見ていると、もつとも説明に時間を費やした百八の煩惱の由来がまったく紹介されていませんでした。なるほど、多くの異説がある百八の煩惱の由来ですが、もつとも有力視される『俱舎論』所説の数え方は実に複雑で、制作スタッフの方が放送を回避されたのも致し方ありません。ここではそれを承知で紹介してみます。

まず私達の煩惱は、潜在的煩惱である随眠ずいめんと顕在的煩惱である纏てんに二分されます。前者の随眠は、①貪とん—むさぼり、②瞋じん—いかり、③痴ち—おろかさ、④慢まん—おごり、⑤疑ぎ—うたがい、⑥有身見うしんけん—自我が実在するとする見方、⑦辺執見へんじゆけん—自我は滅するあるいは不滅であるとする見方、⑧邪見じやくけん—因果の道理を否定する見方、⑨見取見けんじゆけん—自己の見解を是とし他の見解を否とする見方、⑩戒禁取見かいこんじゆけん—不正な戒律などを守ることで解脱が得られるとする見方、以上の一〇種です。次に、この十随眠を欲界・色界・無色界の三界に配当します。さらに、それらの随眠を断ずる段階として、①見所断けんしよだん—真理の把握によつて煩惱を断ち切る段階、見苦所断・見集所断・見滅所断・見道所断に分かれる、及び、②修所断しゆしよだん—

修行によって煩惱を断ち切る段階、以上の五段階を設定し、①見所断では八八、②修所断では一〇の随眠を断ち切るとして、総じて九八の煩惱と数えます。

後者の纏は、①無慚むざん—自己に恥じらないの事、②無愧むき—他人に恥じらないの事、③嫉しつ—ねたみ、④慳けん—ものおしみ、⑤惡作あくさ—悪しき行為、⑥睡眠すいめん—情眠、⑦掉挙じょうこ—頭に血が上った状態、⑧惛沈こんじん—心が深く沈んだ状態、⑨忿ふん—思い通りにならない事への怒り、⑩覆ふく—自分の罪を覆い隠す事、以上の一〇種です。これら九八の随眠と一〇の纏を合わせて百八の煩惱と数えるのです。

こうした百八の煩惱を除夜の鐘の一撞き一撞きで洗い流して、清浄な身と心で新年を迎えるのです。とはいえ、冒頭の法然上人のご法語に示されるように、あるいは、百八煩惱の紹介からも分かるように、それほど除夜の鐘を聞こうとも、時々刻々、煩惱を積み重ね続けているお互いなのです。あちらを立てればこちらが立たず、除夜の鐘を巡るトラブルをはじめ、日々、耳に入ってくる事件や事故を通じ、この世が娑婆であるという思いは一層強くなるばかりです。

この番組が放送された十二月八日は、釈尊がさとりを開かれた成道会でした。この世に出世された釈尊の本懐こそ、お念仏の教えを伝え遺すことでした。釈尊のおさとりを仰ぎつつ、お念仏を称えて参りましょう。

合掌（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第七十六回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

在異郷十有余年、愈々帰国④



二年後に迫った 法然上人七百年遠忌

渡辺海旭は、ドイツ駐箚大使・珍田捨己から私邸に招かれ、夫人手作りの懐かしい日本の家庭料理のもとでなしをうけながら、はやくも歓談の半刻がすぎたが、いまだに自分が遠くフランス国境の古都から大帝都へ呼び寄せられた理由がさっぱり腑に落ちていなかった。

相手は、わが日本が長き眠りから覚めて国を開いた折り、うかつにも有力諸外国と結んでしまった不平等条約のうち関税自主権を取り戻そうと小村寿太郎外相の名代として、ドイツ帝国へと乗り込んできた、敏腕外交官閣下である。

片や、こちらは資金援助をたちきられ異境から帰るあてもない、しがたない学僧である。いくら学生時代に英語の手ほどきをうけた先生だからといって、親しく自宅に招かれて、

帰国を促されるいわれがわからない。どうみてもお国のため、いやそれは大げさにしても何らかの大事ゆえに、大外交官閣下から、貴重な日本酒を注がれながら、帰国を懇請されるほどの大人物であるはずがない。

海旭は、猪口をぐいと飲み乾すと、胸中にたまりにたまった疑念をはらすべく、意を決してたずねた。

「と、ところで、珍田閣下、なぜ私のようなものに、これほどまでにご厚情をおかけいただけるのでしょうか？」

「閣下はよしたまえ。芝増上寺境内の学寮時代にもどつて、先生でよい、先生で」珍田は手を左右にふると続けた。「なるほど、頭脳明晰な渡辺君でも、見当がつかんかね」珍田は身を乗り出すと、海旭の顔を覗き込んだ。「教えてやりたいのは山々だがな、残念ながらこれは国家機密なので話してやるわけにはいかん」珍田は大仰な高笑いをつくると、またまた手をふった。「いやいや、それは冗談だ」

といいながら、髭をたくわえた口元に笑いは残したものの、目は笑っていないかった。「では、本心をいおう。私は、統治者たる皇帝が黄禍論を内外に鼓吹するような国にいるとこの先危ないからとにかく帰国せよと忠告した。それは嘘ではない。しかし、そんな消極的な理由だけで君に帰国を促しているのではない。いいかね、色々調べさせてもらったが、君にはいまこそ日本に帰ってやつてもらわねばならないことがあるのだ」

海旭は珍田を見つめ返した。珍田は真顔で、口元からも笑みは消えていた。

「私は縁あつて藩命でアメリカに留学してキリスト者となったが、我が家は代々浄土宗だね」津輕藩の学者であつた珍田家の菩提寺は弘前の浄土宗の名刹だった。「たしか、再来年の明治四十四年は法然上人が虚しくなられて七百年の節目の年にあたる」

海旭は思わず居住まいを正した。珍田にいわれるまでうっかり失念していたが、宗門で

最大の記念事業が、二年後に迫っていた。前回の六百年忌は江戸後期の文化八年（一八一）に催され、そのときの記録が東西の総本山である増上寺や知恩院に残されているが、それは盛大なものであつた。

珍田は、一瞬瞑目した海旭が眼を見開くの待つてから言葉を継いだ。

「百年に一度の大事業が近づいておるというのに、異教の地にあつて学問三昧でいいのかね。宗門としてはあれこれ考えているらしいが、文明開化の新時代にふさわしい企画がなかなか思いあたらないらしい。宗門外の私がいいうのもなんだが、渡辺君どうだね、異境の地に十年いたことで得た新知識を生かして宗門に恩返しをせんか」

大外交官が宗門内部の事情にこれほどまでに通じているとは驚きだった。ひよっとしたら、海旭の留学仲間で四年前に帰国した荻原雲来が海旭の帰国を促し、法然上人七百年遠忌事業に活用しようと宗門中枢に働きかけた

のかもしれない。それをうけて宗門の誰か要路が、かつて宗門の学校の英語教師であったという機縁を用いて、珍田に接触したのではないか。あるいは、東京帝国大学の教授で政府にも人脈をもつ畏友の姉崎正治が仲介役を買ってしてくれたのかもしれない。胸中にそんな推理がわいて、問い質そうかと海旭が思案しているのを表情から察知したらしく、珍田は機先を制するようにいった。

「ははあん、この私をつかつて、宗門の誰か、それとも君の畏友の学者先生が、君の帰国を促そうとしていると、考えついたのかね。なかなか鋭いが、それはいえんな。そもそも外交官にとって、情報源をあかしてしまうのは交渉としては下の下だ。したがって、教えることはできん。できんが、あたらずと雖も遠からずということにしておこう」

珍田は手元の銚子から空になった海旭の猪口へ酒を注ぐと、話を続けた。「なんでも、西の総本山の知恩院では、全国の檀信徒から

浄財を募り、御影堂修理と阿弥陀堂建替えと華頂女学校をつくるらしい。さらに、法然上人の一番弟子の親鸞聖人がなくなつて六百五十年の大遠忌とも重なるので、今や全国に四通八達した鉄路で万余の善男善女が京都を訪れるのではないかと、大いに期待をふくらませながら準備に余念がないらしい」

今も昔も両山は良きにつけ悪しきにつけライバル関係にあり、それをあおつて増上寺ゆかりの海旭の帰心を促そうとは、なかなかの交渉上手だ。それにしても本当に宗門の事情をよく知っていると、驚きを覚える海旭の内心を、大使閣下はまたまた見透かしたように言つた。

「条約改正ばかりが私の仕事ではない。外交官のもつとも大事な仕事はインテリジェンス、すなわち情報の収集だ。それも些細なことが重要だ。そこから大事がわかることがあるのでね」

脳裏に「間諜」という古めかしい言葉が浮

かび、海旭はあわててそれを打ち消した。

「社会事業」のすすめ

実はここから先のやりとりが、海旭のその後の人生を決定づけることになる。

珍田は猪口を口元へ運び酒を一瞬口中へふくむと、ぐびりとうまそうに飲み下し、おもむろに口を開いた。

「渡辺君、君に帰国してぜひともやってもらいたいのは、法然さんの七百回忌だけではない。君のことを調べさせてもらったが、ウエルフェア（福祉）にはずいぶんと関心があるようではないか」

またまた「お調べ」か。ビール党であることに始まって、これでは丸裸にされてしまう。海旭は再び脳裏に浮かびかけた「間諜」という言葉を打ち消した。

たしかに海旭は、社会民主党や労働組合、あるいはキリスト教徒たちの救貧活動に興味を覚え、あれこれ文献をあさった。いずれ帰

国したら実践してみたいと考え、「座学」だけでなく、ここベルリンの細民窟を視察に訪れたこともある。

「わ、私としては、ウエルフェアという言葉ではなく、ソシアル（社会的）な事業と呼びたいと思っております」と海旭は留学中に得た持論の基を開陳した。「これからの日本の仏教はソシアルな社会宗教となるべきであり、そのためにも救貧活動を社会事業として取り入れていくべきです」

当時はまだ「社会事業」という用語はなかった。それは帰国後の海旭による造語だといわれているが、その萌芽は留学中に芽生えていたのである。

「ソシアルな社会宗教であれというのは、私も同感だ」と珍田は大きく頷いた。「実は私もアメリカ留学でその必要性に目覚めたのだが、外交官になってしまい、二つの仕事はできません。そこで君には本来私がしたいと思っていたことをぜひやってもらいたいのだ」

珍田がアメリカで四年間学んだのはメソジスト派の大学であった。そこで洗礼をうけ牧師にもなるのだが、彼らは二十世紀の初頭から、聖書の真理を實行にうつす「社会的福音」を掲げて活発な活動を行ない、共済組合や消費組合さらには労働組合を通じて信仰活動を展開していた。

「日本が列強に伍していくためにも、社会的な事業は絶対に欠かせない」と珍田も持論を展開し始めた。「それがアメリカやヨーロッパの繁栄と安定を下支えている。どうも日本の為政者はこのことがよくわかっておらん。国を富ませる一方で、それによって生み出される貧困細民を救済せねば国の基がくずれる。従って、これは諸刃の剣でもある。宗教家がそれを行なえば、困窮者を救って国の基は安定する。しかし社会主義者に委ねると、国に不満をいだく困窮者をおおることになるからだ」珍田は一呼吸いれると訊ねた。「賀川豊彦という男を知っておるかね？」

海旭は首を横にふった。初めて聞く名前だった。

「賀川君は長老派のキリスト者で、私とは宗派は違うが、わがメソジスト派の『社会的福音活動』に共感しているらしい。昨年末に神戸の貧民窟で救済活動を始めたと聞いて、私は大いに注目しておる」

賀川豊彦は、当初は神戸、後に東京深川の貧窮地区にセツルメントを設立、日本における消費組合、協同組合の生みの親ともなり、帰国後仏教の側から救済セツルメントと共済活動を展開する渡辺海旭と並び評されることになるが、この時点ではともに無名で、後によりライバルになるとは互いに知る由もなかった。

「しかし、賀川君の活動も立派だが、所詮日本ではキリスト教は圧倒的な少数派だ。多数派である仏教にこれを担ってもらわなければ大きくは育たぬ。だから、渡辺君、君にそれを担ってほしいのだ」

珍田は身を乗り出すと、海旭の目をみつめていった。「もう一つ君に帰国してやってもらわねばならぬことがある」海旭が首を傾げると珍田は畳み込んだ。「それは教育だ。私も教師の端くれだったので承知しているが、教育も救貧と同じぐらい国の基だ。私がかつて教鞭をとっていた東京支校の後身、芝中学校が危ういのだ。今は初代校長の松濤賢定師の後を萩原雲来君が担っているが、彼は学者としては優れていても教育者としての自信がもてないらしい。君と雲来君と望月信亨君は優秀三羽鳥だった。学業では君は二人の後塵を拝していたが、何かを生み出す知恵と統率力では群をぬいていた。だから二人をさしおいて総代となつて名演説をなしたことは、私だけでなく当時の教師たちの一致した見方であり、今も語り草だ。いいかね、増上寺境内の学校は君を待っている。いますぐ帰りました」

大外交官の熱の入った大演説に、海旭は思

わず同意しそうになったが、踏みとどまって答えた。「も、申し訳ありません。身に余るご厚情には感謝をいたしますが、今一度考えさせてください」と頭を下げた。実は、海旭には即答できない深い事情があつたのである。外交官閣下はやおら席を立つと、声を荒げた。「ここまで説得しても明快な返事が得られないのであれば、いた仕方がない。最後の切り札を切ることにしよう」といって、パンパンと手を叩き、妻の岩を呼び寄せた。

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●字

〈特選〉

良寛の書に風一字秋さやか

笠井 亜子

良寛は江戸時代の僧侶。書家ではないが味のある文字を書いた。明治の文豪夏目漱石はその蒐集家として知られる。「天上大風」の書を見たことがあるが「風」一文字もあるのであろう。秋の爽やかな風と書の対比である。

〈佳作〉

ハロウインググッズ売り場の誤字脱字

内藤 隼人

紅天狗算なり読んで字のごとし

早田 肇

新酒新蕎麦字面からして嬉し

大野 靖之

●源

〈特選〉

光源となりて十一月の蝶

村田 篠

晩秋の蝶や冬の蝶は、春夏の乱舞に比して儂い。あまり動かず、ときには凍えている。その命の最期を十一月という直截な季語で表

現し、しかも光源としたところ、短い生涯の
きらめきを凝縮した。

〈佳作〉源泉に大猿小猿櫟の実

横山美生子

落葉また舞つて源泉かけ流し

斉田 仁

秋の陽を浴びて電源運ぶ船

岡野 進

●自由題

〈特選〉
休むときこそ首うずめたる鴨一羽

藤堂みずほ

鴨は冬の季語。雁などと同時期の秋に飛来し、春になると北方に帰る。池に休む鴨の姿は微笑ましい。ひょいと首を曲げて自分の羽毛に首を埋めるところを見たのであろう。写生の効いた一句である。

〈佳作〉やぶこうじはつぼつ夜のあかんぼう

目黒 範親

信号を待つ街角に社会鍋

佐藤 雅子

眠くなる日差しの中かの芒かな

篠原 肇



誌上句会〈編集部選〉

■字

柿食えば黒文字のこる皿の上
林檎樹の下丸文字の「さようなら」
ボケットに字足らずの句と団栗と
卒塔婆に六字名号秋落暉
冬近し象形文字の蠢いて
木の葉かつ散る丁字路の理髪店
U字溝静かに休む秋の蝶
秋深し願いの文字が絵馬に満つ

■源

源流を冬の電池として眠る
源流に寄り添う村や紅葉焚く
長谷川 裕
村松典弘

いせ源の鯨鯨吊るす古手鉤
水源を指さす婆さま吊るし柿
こんなにも源泉徴収され冬へ
源氏バイばろばろ砕け冬隣
蛇穴に始源はいつも丸である
井口吾郎
内藤隼人
小林苑を
越野めぐみ
光本富美子

■自由題

八月や九死一生輪禍かな
飼い犬の緋のセーターや白金台
秋晴れや無意味な人と森の中
走ったり転んだりして七五三
水澄んで青信号はずっと先
火薬庫の跡地や秋の植物園
気がつけばしんがりにいる秋の昼
句を作るために落ち葉を踏んでおく
飯島英徳
蘆名宗一
富樫祐天
小林苑を
袖岡 篠
向井 章
月島恭子
奥村宗昭

浄土誌上句会の お知らせ

兼題

締切・二〇一七年三月三十一日
発表・『浄土』二〇一七年五月号
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

節分 自由題

編集後記

水鳥の湖面の下の水清し

岱潤

茨城県桜川市の真壁保育園では、平成四年から全保育児童に家族や先生といっしょに俳句を作ってもらい、一冊の句集にまとめ発刊して、昨年で二十五冊目になる。何回か拙誌でも取り上げてきたので覚えている方もいると思う。子どもたちのユニークな発想や、楽しく、温かな世界に包まれる句集に、私もファンの人だ。こうした句集は創る人が大変だが、いつまでもみんなの心に残ることだろう。

ところで最近当然と思われる習慣、ならわしが行われていない家族が多

いという。たとえば正月行事だ。実家に兄弟、親戚が集まり、餅を食べることをしていない家庭が、半数を超えたという。昨年末、餅つきが各地で中止になった理由を主催者側に質すと、ノロウィルスの脅威だけではなく、実は餅を食べ慣れない子が多く、事故防止のためという理由が最も多かったそうだ。私の町会では餅つきを強行し、大変喜ばれ、来年も是非という声を多く聞く。年間行事をやめてしまうのは簡単なことだ、やらないことの方が楽に決まっている。しかし生活に節目をつける年間の行事、そこには文化があり、何より人が集まることの大事さがある。

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員のの方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森厳寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 松濤泰彦(芝・寶松院)
 真野龍海(大本山清浄華院)
 脳博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
 メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

おもちべつたんべつたんのいいな
 こんな句が真壁保育園の『はいく』の中にあつた。年間の行事を面倒だからやめてしまうという発想だけは、したくないものだ。
 (長)

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

浄土

八十三巻 一三月号 頒価六百円
 年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十九年一月二十日

発行 平成二十九年二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七

FAX 〇三三五七八七〇二六

振替 〇〇八〇・八・八二二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものもいい。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品！！

※ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。